

◆第3話◆ ゲラ刷りと校正刷り

これまでの記述に登場した「活版印刷」「オフセット印刷」という用語は、これからもたびたび登場することになる。なにせ出版物（印刷物）について、書こうというのだから、その密接さは言うまでもない。

これまでに、出版業界（印刷業界）では、ホットからコールドへの業態転換が行われたと縷々述べてきた。しかし、業界用語は、なかなか置き換わっていない。その例として今回、「ゲラ刷り」を取り上げようと考えた。つまり、表題の大学史に限らず、大学案内や講義要項といった定発の印刷物にしても同じことであるが、発注から製品になるまでの工程において「校正」という作業が発生する。

「ゲラ」は、多くの人からその言葉、用語として認知されてきた。事実、老若を問わず、多くの方は、内容チェックのために用意される刷り物に対して一般的に「ゲラ」という呼称を使用している。

では、「ゲラ」なるものを、その実物をご存知かといえば、多くの方がノーである断言できる。校正をするために刷り付けてある「紙」を「ゲラ」と思っている向きがほとんどのはずである。「ゲラ」とは、活字を枠の中に読めるように並べた「版」のことをいう。この「版」のことを「ハンコ」ともいい、それを保存するために入れた箱を「ゲラ箱」と呼んだ。作業をしていない時にこのゲラ箱は、工場の隅に積み上げられていた。「ゲラ」という用語は、活版印刷でなければ必要とされない用語である。したがって、活字が使用できなくなって以降は、死語というべきものである。でもどうして、未だに「ゲラ」と言ったり、「ゲラ刷り」と言ったりするのか、甚だ疑問である。つまり、現状において、厳密には、「校正刷り」というのが妥当な用語となっている。そうは言っても、言い慣わされた用語は、捨てるのが難しい。今も製作現場で、「ゲラ」は、通用している。



実は、活版印刷の時代でも校正に使用する試し刷りは、「校正刷り」なのである。つまり、「本刷り」と分けて使用した用語である。

活版印刷における校正用の刷り付け（ゲラ刷り）は、活字の材料である鉛合金の耐久性から3回程度までを限界値としてきた。だから、4校以上になると、本印刷や紙型をとる前に摩耗して、版が使用不能になってしまう可能性があった。今の電算写植や電子組版方式では、プリンターを使用して刷るので、摩耗という観点からすれば、回数制限は考える必要がなくなった。そうは言っても、出力回数が増えれば、用紙代やインク代など経費が嵩むことに変わりはない。

用語としては、脱活版印刷であれば、できるだけ「校正刷り」と呼びたいものである。しかし、人間それほど変われるものではないから、これからも「ゲ

ラ刷り」ということになるのだろうか。もどかしいものだ。ならば、業者に渡す印刷・製本仕様書には、せめて「ゲラ刷り」と表記することは控えて「校正刷り」と表記しようではないか、と思うのである。